

バックアウト・ムービーズ 私をKOで打ちのめした映画

Round 4

ブロードウェイと広島 - イーライ・ウォラック (アクターズスタジオ創設メンバー)

広島に原爆投下したパイロット、ポール・ティベッツは、「後悔してない」と言い続けた。副操縦士のロバート・ルイスは、1955年、被爆者に寄付金を手渡した。「彼の涙を見て憎しみが消え去ったわ」と当時10才だった被爆者、近藤紘子さんが語ってくれたのは2009年。その紘子さんにある逸話をお伝えした。

ポールと同じ1915年生まれの名優イーライ・ウォラックの新刊本『The Good, The Bad, and Me』が、彼のメッセンジャーから私に届いたのは2007年。C・イーストウッドらが賞賛の言葉を寄せた自伝には、彼がいつも聞かせてくれたエピソードが。

1945年8月、海兵として南仏に駐留中、広島に大型爆弾が投下され、戦争終結のニュース。「やった！国に帰れる！」と兵士達は歓喜。10年後、ブロードウェイ劇『八月十五夜の茶屋』で沖繩人を演じた時、楽屋裏で広島から来た6人の女性に紹介された。着物衣装のイーライに6人は丁寧におじぎ。彼もおじぎを。頭を上げると女性はまたおじぎ。何度も繰り返されるうち、役者の視線は下がり、やがて彼女らの顔を直視できなくなった。1955年5月5日、米国のジャーナリスト達がこの6人を含む計25人の広島女性を招き、計138回のやけどの手術を施したが、



©1966 United Artists - MGM

目に映ったのは焼けただれた顔。元兵士は、終戦の時「国に帰れる」と喜んだ自分を心から恥じ入った。「あの爆弾投下は、一番愚かな行為だ」と話すイーライの目は、とても悲しい。25人に一年半の滞在費、138回の手術、治療を無料で施したアメリカ人と、自国の被爆者にも被爆手帳を出さないケチケチさは対症的。

9/11事件直後にNY入りした私に、「皆が国外に逃げ



イーライ・ウォラックと著者（ニューヨークにて）

ていた時に、ひとり逆方向に飛んできたボクサーにヒューマニティを感じる。それを映画にきなさい」と、脚本執筆を勧めたのは、テロから一年後の2002年9月11日、彼のNYの自宅にて。

1977年、オットー・フランク（『アンネの日記』の父親役）を演じた彼は、12月7日生まれ。26才の誕生日に真珠湾奇襲。「真珠湾のパバと9/11のあなたは、何かで繋がってるのよ」と言う娘のロベルタがアンネ役。イーライと知り合う以前に、アンネの隠れ家を私は何十回も訪れていた。

S・レオーネ監督がイーライを起用したのが、『続・夕陽のガンマン』。「飲ませて酔わせて戦場に放り出すだけの酒を持てる奴が勝者」「こんなに多勢の犬死には見たことない」…戦争の非人間性を皮肉るセリフを要所に配した大活劇で、彼は世界的人気俳優に。2010年、アカデミー賞をイーストウッドから手渡された際、「ローマ法皇から『荒野の七人』が大好きだって手紙をもらった。人を撃ちまくってるのに！」と、会場を笑わせ「生きるために演じてない。演じるために生きてる」と語った。2014年6月24日、98才で亡くなった彼は「私は舞台役者だ」と、私に何度も言った。100本以上の映画に出ても、舞台の芸にこだわり、平和を愛した名優イーライ・ウォラック。



▲ イーストウッド、ロバート・デ・ニーロと共に

(Lucky Day)